

した。

テントクジ 天徳寺 鳳至郡宇出津に在つて、淨土宗に屬する。山號は光明山。天文元年得譽炭西の創建といふ。

テントクジ 天徳寺 珠洲郡越坂に廢跡がある。能登誌に『越坂の散村吹上と云所に、昔天徳寺といふ大寺あつて、今も六千坊・經塚・開山塚・天徳寺など、地名あり。』と記する。

テノ 天野 能美郡金平の内の小宇。

テノウザンシヤ 天皇山社 羽昨郡竹生野に鎮座し、今神明社と號する。村落の前方往來脇に在つて、岡の上の平地方九米。社前の大磐石は石梯の露出したものであらう。里人は垂仁天皇の皇女竹生姫の御墓とするが、それは地名に因んだ傳説に過ぎぬ。

テノウジ 天王寺 能美郡金平に寺屋敷があり、天王寺の跡であると寶永誌に記し、又名淨林坊といふたと能美郡名蹟誌にある。

テノウジ 天王寺 鳳至郡徳成谷内に在つて、眞言宗に屬する。

テノウハマ 天王濱 鳳至郡沖波の端を天王濱といふ。

テノミジヨウ 天香城 ↓サキヤマジヨウ 崎山城。

テノミノミヤ 天香ノ宮 鳳至郡宇出津に在る小祠。能登誌に『天香の宮とて、南の町家の後に岩山有て社あり。元は三宅小三郎の城内に在りしを、此處へ移し奉りて今も奇瑞多し。三月三日祭禮なり。』と記する。

テンビヨウジ 天平寺 鹿島郡金丸にあつた觀音堂で、佛性山と號した。天正中燒亡したといふ。

テンビヨウジ 天平寺 (一)創立—加賀・能

登二國中、後世佛敎界に於いても俗世界に於いても、白山寺に亞ぐ一大勢力となつものは、眞言の大伽藍である鹿島郡の石動山天平寺であつたが、その草創に就いては一も確實な文獻がない。舊傳に従へば、此の地は古へ法道仙人の住んだ所で、天智天皇以降累世帝室の祈願所であつた。元正天皇養老中、智徳上人が勅を奉じて此の山に在り、次いで孝謙天皇天平勝寶に至つて堂塔悉く具備し、是より天平寺と名づけられ、一千年來繁昌の淨域となつたといふ。拾芥抄に、『石動寺在能登國。虛空藏。智徳上人光仁第四草創。』とあるも、稍之に似てゐる。承應三年前田利常、林道春に命じて、新たに石動山天平寺緣起を草せしめたが、それには泰澄開山の事を書いてゐる。次いで和漢三才圖會には、『石動寺在能登郡。眞言。光仁天皇第四皇子智徳上人草創。』とある。拾芥抄を踏襲してゐる。是等の泰澄・法道仙人・智徳上人のこと、一として取るに足るべきはない。蓋し石動山なる伊須流岐比古神社は、延喜式所載の舊社であるから、佛徒が之を利用したことは白山の場合と同一であらうが、何れの世に何人の開闢したかは今之を知り得べくもない。↓イスルギヒコジン

ジャ 伊須流岐比古神社。
(二)建武の回祿—建武二年十月足利尊氏の鎌倉に據つて叛するや、諸國之に應ずる者が多かつた。越中の守護曹門藏人利清亦遙かに之に通じ、十一月その教書を得て、國司中院中将定清に抗したから、定清は之と戦うたが遂に敗れ、能登の天平寺に入つて僧兵の援を受けた。然るに越中軍の來り侵すに及び、衆寡

敵する能はずして、定清は戰死したるのみならず、さしも壯大であつた伽藍は、兵燹に罹つて悉く灰燼に歸した。石動山由來に『九十六代光嚴院御宇、建武二乙亥年兵燹千戈襲來、爲兵火二寺院回祿。』と記するもの、即ち是であり、太平記はこの戰を十二月十二日に在りとしてゐる。しかし石動山衆徒の發した使者が、京師に着して變を告げたのも十二日酉刻とするが故に、參考太平記に之を疑うて、『十二月十二日能登走使告變。而今云十二月二日能登合戰之事。自能登一至京非一日所能至。蓋十字符乎。』として、十二月二日の合戰であらうとしてゐる。

(二)天正以後の衰微—天正九年七月廿三日織田信長は、長連龍の所領鹿島半郡内にある上杉謙信侵入以後の天平寺新神領を削つて、之を連龍に與へた。十年六月天平寺の衆徒が温井景隆等と共に兵を擧げるや、前田利家は火を伽藍に放つて之を陥れ、戰後その神靈五社權現を伊影山に移し、又悉く神領を沒收し、その内鹿島半郡内に在るものは、長連龍の請によつて新知として之を與へた。後十一年十月正親町天皇は、秀吉をして天平寺の伽藍を再建せしむべき綸旨を藩生氏郷に與へられたから、利家は再び神靈を石動山に還御せしめ、百五十石を寄進した。能登名跡志にいふ、『當山開闢の事は、泰澄大師天平の比、上は公卿下は庶民死する者多し。勅命有りて大師加持し給ふに其驗あらた也。さて大師勅定を受け

て神社佛閣建立あり。爰に天平寺も建立有りて石動山と號す。次第に繁榮して坊數も三百六十四坊ありし處、中比衆徒越後の謙信方に與して、利家公に敵せし所不叶して、張本の

般若院・寶達坊・萬藏院の三惡僧を初め、同心の衆徒講堂の前にて被誅、首共を芝ヶ峠と云ふにて梟首あり。夫より衰微して、敵對せざる坊今の五十八坊は其儘被爲置たり。此五十八坊も山一里東策籬山といふに權現を移し奉りし所にありし者どもと云へり。神主二人今にあり。大森氏は山に在住、清水氏は今上村にあり。大宮坊の看司は東林院と云ふが兼帶也。世々勅願所として、毎歲三度の御撫物を禁裡より御納めあり。同正・五・九月の御祈禱の札上る也。北陸七ヶ國の大社、御朱印を以毎歲三度の智識米とて勸進あり。社領百五十石、本社御修葺あり。今又繁昌して諸堂諸坊結構也。毎年三月廿四日・六月四日は權現の祭禮にて、於講堂大般若經講誦あり。人形立物山等ありて賑はし。此日諸人多く登山する也。誠に大地と云ひ靈山也。委は明曆(承應の誤)年中に林羅山子の書かれし緣起にあり。本道此二宮より登る也。一里半の道程、芝山・裸谷・四ヶ谷・阿彌陀・嶺・護摩堂採とて、難所の古戰場あり。裏道七尾の城山の脇より登り、多根越とて所口より三里あり。又多根村とて、石動山の寺領百姓あり。此村に石動山へ勅使の宿せし者の筋とて、百姓に四位と云ふ者あり。石動山より越中永見へも三里あり。石動山一山は松木一本もなし。是は此山の山神、磐山和尚に松木を參らせしとて、永光寺には松多くあり。』と。

(四)寺坊—寺坊の數は、戰國以前三百餘坊と言はれたが、藩政以後七十二坊となり、その中の十四坊は更に破壞して寺號のみを存し、五十八坊は明治の初に至るまで繼續した。↓シンゴンシユウジン 眞言宗寺院。